



34:1 モーセはモアブの草原からネボ山、エリコに向かい合わせのピスガの頂に登った。主は、彼に次の全地方を見せられた。ギルアドをダンまで、

34:2 ナフタリの全土、エフライムとマナセの地、ユダの全土を西の海まで、

34:3 ネゲブと低地、すなわち、なつめやしの町エリコの谷をツォアルまで。

34:4 そして主は彼に仰せられた。「わたしが、アブラハム、イサク、ヤコブに、『あなたの子孫に与えよう。』と言って誓った地はこれである。わたしはこれをあなたの目に見せたが、あなたはそこへ渡って行くことはできない。」

34:5 こうして、主の命令によって、主のしもべモーセは、モアブの地のその所で死んだ。

34:6 主は彼をベテ・ペオルの近くのモアブの地の谷に葬られたが、今日に至るまで、その墓を知った者はいない。

34:7 モーセが死んだときは百二十歳であったが、彼の目はかすまず、気力も衰えていなかった。

34:8 イスラエル人はモアブの草原で、三十日間、モーセのために泣き悲しんだ。そしてモーセのために泣き悲しむ喪の期間は終わった。

34:9 ヌンの子ヨシュアは、知恵の霊に満たされていた。モーセが彼の上に、かつて、その手を置いたからである。イスラエル人は彼に聞き従い、主がモーセに命じられたとおりに行なった。

34:10 モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった。彼を主は、

顔と顔とを合わせて選び出された。

34:11 それは主が彼をエジプトの地に遣わし、パロとそのすべての家臣たち、およびその全土に対して、あらゆるしるしと不思議を行なわせるためであり、

34:12 また、モーセが、イスラエルのすべての人々の目の前で、力強い権威と、恐るべき威力とをことごとくふるうためであった。

申命記はモーセによって書かれましたが、さすがに自分が死んだ様子を記すことはできません。これらは後の者が（おそらくはヨシュアなどが）、申命記を完成されるために付け加えたものです。ここもまた聖霊によって書かれたもので、申命記が神の目的を持って書かれたものであるということが分かります。

モーセは主から約束の地を見せられました、「わたしはこれをあなたの目に見せたが、あなたはそこへ渡って行くことはできない。」と言われました。彼は120歳になってはいましたが、「目はかすまず、気力も衰えていなかった」ので、なぜ自分がこの世を去らなくてはならないのかと思ってもおかしくありません。

それでも、彼は神を恨むことも、民の不従順のせいにすることも、自分の行いを後悔することはありませんでした。人間は完全ではありませんが、主のなさることは最善だからです。

実は約束の地とは言っても、それは天の永遠の住まいの影にしか過ぎないのです。その証拠に今でもこのカナンの地ではイスラエルとパレスチナとの領土問題が続いています。モーセは完全な解決であり、安息であり、喜びであるところの神のもとに行くのですから、それは最善です。

またその時も最善だったと思われず、この後ヨシュアが指導者となってカナンの地を勝ち取り、そこで国としての基礎を築いたことを考えると、リーダーが変わることで成功したといえるでしょう。何より重要なことは、ヨシュアがモーセに従順であったということです。モーセ自身が自分に従順であっても意味がありません。後継者がモー

セに、すなわちモーセを通して与えられた主の御心に従順であったということが大切です。その従順さこそがイスラエルに必要であったのです。

主の最善の判断と時に信頼しましょう。自分の願いよりも主の御心を悟り、本当の希望を見出しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

